

**「映画学のための基礎研究」
資料の整理・分析と問題提起**

研究年度・期間：平成5年度～平成6年度

平成5年度

研究代表者：山田 幸平

(文芸学科 教授)

研究ディレクター：豊原 正智

(芸術学部 助教授)

共同研究者：吉岡 敏夫 上倉 庸敬

(芸術学部 助教授) (大阪大学 文学部 助教授)

平成6年度

研究代表者：山田 幸平

(文芸学科 教授)

研究ディレクター：豊原 正智

(芸術学部 助教授)

共同研究者：武谷なおみ 吉岡 敏夫

(芸術学部 助教授) (芸術学部 講師)

山田 兼士

(芸術学部 講師)

研究助言者：上倉 庸敬

(大阪大学 文学部 助教授)

研究補助者：池本 幸司

(大学院 副手)

研究経過の概要

前年度(平成5年度)に引き続き文献、作品などの資料の蒐集及びそれらの整理・分析が行われた。哲学的問題意識からプロッホ、ドゥールズ、ガタリ等の文献が集められ、特にドゥールズに関しては、1983年にCinéma 1、1985年にCinéma 2がフランスで出版されて以来、日本でも映画学研究者の間で注目され、それに関する研究発表も行われつつある。また、比較的少ない初期写真・映画史の文献、日本映画関係の資料並びにコクトー、デュラスなど個別的な文学・映画に関わる文献及び脚本の資料が補足的に蒐集され、それらの整理・分析が行われた。

作品資料購入もさることながら、最近衛星放送による過去の映画の放映が活発に行われており、それからの作品の録画は当研究者たちにとっても貴重な資料となり、積極的な蒐集が行われた。特にアジア映画(中国、台湾、韓国、香港等)最盛期の日本の東映、大映、松竹等の映画会社、監督、ヨーロッパの監督、アメリカ西部劇等々の特集は大変有益な資料となった。

文献蒐集に関しては、直接東京での蒐集調査も有意義であった。また、東京国立近代美術館フィルムセンター、写真美術館での調査研究、その他研究打ち合わせなどの為研究出張を行った。

研究会として、4月から2月まで、全体の研究打ち合わせ会議を2回、グループごとの研究会を10回行った。今年度も日本映画に関して、脚本家、美術監督、俳優等に、研究助言者を交えて直接話を聴く機会をもった。

今年度は東京国際映画祭が京都で開催され、共同研究者は積極的に参加し、作品並びにその

監督との質疑応答を直接聴くことができ、特にアジア映画のレベルの高さを実感できた。またそれに関連した京都での日本映画の歴史、誕生に関する文献資料がいくつか出され、蒐集し、それについての研究会も特に行った。

研究成果について

本研究の目的は、映画学の研究に向けて、本学の文献並びに作品資料の上にさらに必要な資料を蒐集し、それらの整理・分析を通じて、共同研究者それぞれが、それぞれの立場から、基礎的な問題点を明らかにし、その後の映画学研究のパースペクティブを形成しようとするものであった。前年度に引き続き補足的な資料蒐集が行われ、整理・分析されたが、ヨーロッパ特にフランス、ドイツの、映画 - 哲学・美学、映画 - 文学・文芸学関係、アメリカ映画及び初期の歴史、また日本映画初期の歴史に関する文献及び作品などの蒐集に関して一定の成果をあげることができた。また研究会を通して、実際の撮影現場や映画監督、脚本家、撮影監督、美術監督、俳優等への直接的な取材によって、限定的ではあるが過去及び現在の日本映画の状況について研究の資料と方向の手がかりが得られたのではないだろうか。作品研究に関して、山田（兼）は成果の一部を日本映像学会関西支部研究会において、「ボードレリアンとしてのジャン・コクトー - 映画「詩人の血」「オルフェ」「オルフェの遺言」の詩学 - 」として発表した。その他、研究者は映画雑誌（「FB」等）を通して研究成果の一部を発表した。

2年間の本研究を通じて、研究会において、特に基礎的な文献及び具体的な作品に関する過去の研究資料の不足が問題として出された。特に百年という短い映画の歴史にもかかわらず、洋の東西を問わず映画史初期の具体的作品に関する資料については少なくまだ不明な部分もあり、最近増えつつあるとはいえ、今後の映画学の体系化に向けて蒐集が不可欠であろう。同様にそこでの研究が盛んにならなければならない。また同時に現代テクノロジーの直接的な影響をうけて様々な変化を遂げつつある現代の映画についても単なる文化現象としてとらえることなく、めまぐるしく変貌を遂げようとしているだけにしっかりした基礎を築き、映画の理論武装がなされなければならないだろう。そのためには美学・芸術学、文芸学を始めとして、広い意味での「映画哲学」が求められるのではないか。その方向での本学の文献、作品資料の充実が望まれる。

研究の反省

既に研究成果において述べられているように、本学における映画関係の文献、作品資料はまだまだ不十分である。本研究においてもそれは当初から明らかであり、積極的かつ多面的なそれらの蒐集が試みられ一定の成果はみられたが、「基本的な」、「体系的な」蒐集がなされたとは必ずしも言い難い。それは歴史の浅さと多様な側面をその理由に挙げることは簡単だが、何よりも「学」としての映画研究の方法論の欠如、従って「学」としての研究の浅さが挙げられる。体系化を言う前にそのような方向での地道な研究の積み重ねが必要に思われる。明確なそ

のパーспекティブの形成は必ずしもできなかったが、今後の課題として、新たな研究体制の中でそれをめざしたい。

今回の研究メンバーは多彩で、実にお互いが刺激を得ることが多かった。しかし一方でコミュニケーションの不足もやや見られ、十分な相互補完的体制ができなかった点は反省材料である。また資料集の作成が未完に終わったが、それは今後新たな研究体制の中に引き継がれるだろう。

一部、阪神大震災の影響で最後のまとめが十分できなかった面もあった。